

コロナ渦でも何でも五輪開催に固執するスガ政権が突然決めた

「処理水海洋放出」なんでダメか

<政府の言明とそのウソ>

(1) 原発汚染水を保管するタンクの置き場所がない

⇒土地はある！ないのは「やる気」

(2) 放出するのは ALPS(多核種除去設備)で処理したトリ

チウムだけの「処理水」

⇒「ALPS 処理水」ではなく「欠陥 ALPS 猛毒汚染水」

(3) トリチウムは「水」と同じ。世界の原発からも放出

⇒トリチウムが危険。「水」だからこそ内部被ばく。

(4) さらに濃度を薄めて放出するので問題ない

⇒薄めても「放出」総量は減らず。

「水」だからこそ海から戻って来る。

(5) IAEA(国際原子力機関)とアメリカが「支持」。風評対

策には全力を尽くす

⇒「支持」の理由は金と中国けん制。さらにねらいは再

処理施設からの「放出」。風評被害ではない！実害！！

(1) 土地はある！ないのは「やる気」



- ・新しいタンクは「原発の周りの空き地」にたくさん作れる。
- ・7年前に経産省公募に応じたロシア RosRAO 社の 11 年間で貯留量を 2000 分の一(タンク一つ分)にできる技術が無視し、2018 年にトリチウムを分離できる技術も完成した近畿大学の実用化支援の申請も却下した。
- ・環七地下で実績のある巨大タンクも作ろうとせず、10 年間、政府は何もしていない。

(2) 「ALPS 処理水」ではなく「欠陥 ALPS 猛毒汚染水」

- ・ALPS3 基のうち 2 基は日本政府の最終許可を受けていない「試験運転」。
- ・2018 年 8 月メディアのスクープで、合計で約 89 万トンまで溜まっていた「処理水」のうち、84%に当たる約 75 万トンが安全基準を満たしていなかったことが発覚。

それも、基準値を大幅に超えたストロンチウム 90、ヨウ素 129、ルテニウム 106、テクネチウム 99 などの放射性核種が次々と検出。

これらの中で特に危険なストロンチウム 90 は、最も含有量の高い貯水タンクのものは、1 リットル当たり約 60 万ベクレル、なんと基準値の約

2 万倍。

他の放射性核種も、基準値の数十倍から数百倍のものが数多く検出。

・外国がトリチウムを海洋投棄しているのは、「核燃料に直接触れない2次冷却水」。

・4月13日に海洋放出の方針を決めると同時に、経産省は「ALPS 処理水」の定義を変更。

『トリチウム以外の核種について、環境放出の際の規制基準を満たす水』のみを『ALPS 処理水』とする」

それによって、今まで「ALPS 処理水」と呼ばれてきた 122 万 m^3 のうち、90 万 m^3 が「ALPS 処理水」ではなくなった。

(3) トリチウムが危険。「水」だからこそ内部被ばくする

・「三重水素とも呼ばれるトリチウム水の分子構造は水とほとんど変わらないため、人体にそれほど重大な影響は及ぼさないと政府はいう。

しかし、分子生物学者はむしろそれは逆だという。

ほとんど水と変わらないがゆえに、人体はトリチウムを水と区別できず容易にこれを体内の組織に取り込んでしまう。

そのためトリチウムは微量でも体内に長期間とどまり、その間人体を内部被ばくにさらし続ける危険性がある。

日本の放射性物質の海洋放出の基準は 1 リットルあたり 6 万ベクレルで、これは ICRP（国際放射線防護委員会）の勧告に則ったものだ。

しかし、分子生物学者の河田正東氏は、ICRP 勧告はトリチウムの OBT（Organically Bound Tritium＝有機結合トリチウム）としての作用を明らかに過小評価していると指摘する。」（大島堅一龍谷大学政策学部教授）

・「政府は『トリチウムは弱いエネルギーのベータ線をだすだけで形態は水なので危険性は低い』というが、そのエネルギーは、人間や生物の体を創る分子の結合エネルギーに比べれば何百倍もの大きなエネルギー。

トリチウムは存在形態が水であり、水は体内に入っても 10 日間程度で出て行くから心配いらいあにというのは嘘八百。水だからこそ人体内の細胞(特に DNA)にある水素と置き換わり、有機結合トリチウムとなり人体に長くとどまるほか、核分裂してトリチウムという水素がヘリウムに変わるので DNA 損傷のダメージも大きい。

すでに、重水素を使い、重水が中性子を吸収して大量のトリチウムが発生するカナダの CANDU 炉や、日本でも、炉心制御のために大量に入れ

るホウ酸と、これを中和するためのリチウムが中性子を吸収してトリチウム排出量が多い佐賀玄海、北海道泊などの加圧水型原子炉の周辺で白血病ほかの多発が見られる。」(ちよぼちよぼ市民連合田中一郎)

・トリチウムの半減期は 12.3 年だが、安全になるまでには 100 年も掛かる。人体に取り込んだ場合は、内部被曝によって遺伝子を傷つけ続ける。

(4) 薄めても「放出」総量は減らず。「水」だからこそ海から戻って来る

・自然界に放たれた「トリチウム水」は、水と全く同じ振る舞いをする。

海で、太陽に加熱され、「トリチウム水蒸気」になり、「トリチウム雲」となって、大地に「トリチウム雨」となって降り注ぐ。

これからは、降雨のたびに、降り注ぐ雨の中の「ベータ線」に注意しないと、体内に「トリチウム水」を取り込んでしまう。

水源地に降った「トリチウム雨」は、間違いなく水道水に混入して、蛇口から出てくる。

「トリチウム水」を、海洋放流する事は、核汚染物質の「トリチウム水」を自然界全てに撒き散らす行為。

・濃度規制だけでなく総量規制を入れなければ規制にならない。

・「希釈しても(トリチウムの)総量が減るわけではない。(食物連鎖によって濃縮する)生物濃縮でメチル水銀が人体に影響を及ぼした事実を私たちは水俣病で経験した。人体への影響が明確になっていない段階での放出は許されない」(2021年4月21日水俣病患者9団体反対声明)

・海洋放出は「30~40年かかる」(東電社長)と言われる、とてつもない量。しかもこの汚染水の量は溶け落ちた核燃料デブリを取り出さない限り、日々増え続ける。



(5) 「支持」の理由は金と中国けん制。

さらに、ねらいは再処理施設からの「放出」。

風評被害ではない！実害！！

・ IAEA と米国はなぜ日本の汚染水放出決定を支持したのか。

そもそも IAEA は、基本的に原発推進の組織。

さらに、原発大国の一つである日本の IAEA での影響力は強い。

IAEA の正規予算の分担率で日本は 8.2%を占め、米国(25%)、中国(11.6%)に次いで 3 番目に多い。

汚染水の海への放出を支持した米国と日本を合わせれば 33.2%となり、圧倒的な分担率を占める。

そして、アメリカバイデン政権は「気候変動など環境問題に重大な関心」と言いながら、中国をけん制することを優先して日本を支持。

・ さらに、政府のねらい目は再処理施設からの放出

青森県六ヶ所村・使用済み核燃料再処理工場をフル操業した場合(2025年予定)、福島原発の汚染水タンクの現在の総量 860 兆ベクレルに比しても、年間 9700 兆ベクレルという桁違いのトリチウム汚染水を放出する。

自民党は日本独自の核技術の確立を目指して再処理工場に固執してきた。それは核 武装に必要不可欠だから。福島原発事故の問題に踏みとどまっている場合ではない、これが菅政権の本音。

「海洋放出」は国際法違反の「汚染物の海洋投棄」であり、

風評被害ではなく実害！！！！